The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代大阪語変遷の研究
Author(s)	金沢, 裕之
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40385
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 14 】

氏　　名	金沢裕之（かなざわ ひろゆき）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　12805　号
学位授与年月日	平成9年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**近代大阪語変遷の研究**
論文審査委員	（主査） 教授　真田　信治 （副査） 助教授　仁田　義雄　　教授　土岐　哲

論文内容の要旨

本論文は，これまでの国語史研究において対象とされることが少なかった江戸末期〜明治・大正期の大阪語（「近代大阪語」）の生成や発展について，戯作類や落語資料を利用して迫究したものである。

論文は七つの章から構成されている。第一章「序論」と第七章「まとめ」は，課題の全般について述べたものであり，第二章〜第六章は，各表現形式について具体的に論じたものである。

第一章「序論」では，本論文の研究史上の位置付け，並びに本論文で調査対象とする資料（群）について述べられる。近世後期から明治期にかけての時代は，江戸語から東京語，さらには東京語を母胎としての標準語が成立する時代であり，それらに関する研究は著しく進んできたのに対し，近世前期まで「中央語」の位置を占めていた京阪のことばは，この時期の言語資料が絶対的に不足していることもあって，これまでの国語史研究の流れの中ではほとんど対象にされることがなかった。そうした状況の中で，江戸末期の戯作類，明治中期の落語速記本，明治後期〜大正期の落語SPレコード，という三種類の大阪語資料の存在が明らかになり，従来から利用されていた江戸中期〜後期の洒落本をも併せた四種類の資料を検討することによって，この期の大阪のことばの歴史的変遷について辿ることが可能となった。これらの資料は，それぞれの資料的性格に関して異なるところも多いが，当時の実際の話しことばに近いという点では共通したものが見られるのであり，その資料的性格や特徴についてここで詳しく言及される。

第二章は，第一節「指定表現」，第二節「推量表現」，第三節「伝聞・推定表現」からなっている。第一節「指定表現」においては，現代の関西弁のキーワードの一つである指定助動詞の「ヤ」が，(1)江戸末期に生まれ，明治中期には一般にかなり定着していたこと，(2)使用者の属性から見ると，若年層の女性から広まっていったこと，(3)表現の点から見ると，「テ敬語」形を中心とする待遇表現において早く採り入れられたこと，(4)形態の面では，接続助詞の下接した場合が先行し，最も遅れるのが言い切りの形であること，などについて述べられる。第二節「推量表現」においては，「ウ・ヨウ」/「ジャロウ」形から「ヤロウ」形への推移が見られ，その中でも特に明治中期〜後期においては，「ヤ」の定着を基盤として，推量表現全体が一気に「ヤロウ」形に収斂してゆくことについて述べられる。第三節「伝聞・推定表現」においては，江戸後期には「ゲナ」がほぼ伝聞専用の用法になるのに対し，「ソウナ」には推定と伝聞

の両方を含む用法が見られ，その中でも推定に関しては，時代が下がってゆくにつれて推測の判断の根拠が自己内部のものから次第に外的なものに移ってゆくという流れを窺うことができ，この流れの先に伝聞の用法を想定することが可能となることが述べられる。一方，明治期に入ると，「ゲナ」はほとんど使用されなくなり，それに替って「ソウナ」がほぼ伝聞専用の用法となる。なお，推定の用法を担ったと推定される「ラシイ」はその用例がまだあまり見られず，この傾向は江戸・東京語の場合とも同様であること，などについて述べられる。

第三章は，第一節「打消表現」，第二節「打消過去表現」からなっている。第一節「打消表現」においては，(1)大勢として，「ヌ」が音変化を起こして生まれた「ン」が，この時期を通して一般的に使用されていたこと，(2)江戸期には「ヌ」の残存も見られる一方で，明治中期から後期にかけて「ヘン」が成長を見せていること，(3)「ヘン」は，使用属性としては女性の方から進み，また形態的には助詞下接の場合から進むが，体言下接の場合には未だ「ン」の段階に止まっていること，(4)エ段音に「ヘン」が接続する打消形は，下一段型可能動詞の打消形の場合から，それも明治中期の比較的早い時期に生まれたと推定されることについて述べられる。第二節「打消過去表現」においては，「打消表現」の場合とは異なり，この時期ほぼ一貫して「ナンダ」形が用いられているが，明治中期の資料に一部「ンカッタ」「ンダッタ」「ナカッタ」の例が見られ，「ナカッタ」から分出した「カッタ」が打消ンの地域に取り込まれるという，現代の，いわゆる「ネオダイアレクト」化とも言うべき現象の萌芽がこの時期に見られること，などについて述べられる。

第四章は，第一節「可能一般」，第二節「副詞「ヨー」」からなっている。第一節「可能一般」においては，この時期「能力可能」の場合には一貫して副詞の「ヨー」を使用する表現が使われていること，一方「外的条件可能」の場合，一段型活用の動詞ではこれも一貫して「ラレル」形が使われていることから，変化の面から問題となるのは五段動詞の場合であり，その状況を調べた結果，明治後期頃を境にして，「レル」形と可能動詞形の拮抗状態から流れが一挙に可能動詞形に傾いてゆくことが述べられる。そうした可能動詞形の進展においては，時代的にはずれるが，江戸語の場合と似たような様相が見られることが述べられる。第二節「副詞「ヨー」」においては，数はさほど多くはないものの，この時期コンスタントに用例が見られる副詞「ヨー」を使用する可能表現の全用例が検討され，「能力可能」的な性格とともに，渋谷勝己が提案する「心情可能」的な性格が見られることが述べられ，その成立の背景や心理的メカニズムなどについても言及される。

第五章は，第一節「順接仮定条件」，第二節「順接確定条件」，第三節「順接確定条件〈補遺〉」，第四節「逆接条件」からなっている。第一節「順接仮定条件」においては，江戸後期において一旦機能的な分化を果たす「ト」「バ」「タラ」「ナラ」の諸形式が，時代が下るにつれて「タラ」形に統合してゆく様相を検討し，現代にもつながるこの現象は，時治後期においてすでにその変化の主要な段階をほぼ終えていたこと，また，それが，分析化・論理化といったことばの近代化とされる現象に逆行するかに見える特異ともいえる変化であることが述べられる。第二節「順接確定条件」においては，この表現を担う形式が歴史的には，ユエニ→ホドニ→ヨッテ（ニ）→サカイ（ニ）と変化してきたことを確認し，明治後期に至ると，ヨッテニとサカイが拮抗状態にあることが述べられる。なお，ヨッテニとサカイの使い分けについては，文体・接続・意味内容，使用者の属性などの面から検討したものの，使い分けの基準が明らかにはならなかったと述べられる。第三節「順接確定条件〈補遺〉」においては，第二節での結果を承ける形で，昭和初期の落語資料を利用して，再びヨッテニとサカイとの使いけの基準を明らかにしようとする。比較的明治期の特色を残していたといわれる五代目笑福亭松鶴による『上方はなし』に掲載された作品を資料として，第二節と同 様の検討が進められるが，ここでも結果的には使い分けの基準を明らかにすることができなかったことが述べられる。第四節「逆接条件」においては，逆接仮定の場合，それを担う形式が，歴史的には，ト（モ）→テ（モ）→カテと大まかには変遷してきており，一方，逆接確定の場合は，ド（モ）→ガ→ケドと変化してきており，「テモ」「ガ」の段階でほぼ安定状態に入った近代東京語の場合とは異なり，更にもう一段階の変化が進行，先行しているところに大阪語における特色が見られると述べられる。

第六章は，第一節「テ敬語」，第二節「ハル敬語」，第三節「レル・ラレル敬語」からなっている。第一節「テ敬語」においては，この時期頻繁に使用されたテ敬語の用例を検討した結果，(1)女性専用的なものから，女性男性ともに使

用するものに変わってきたこと，(2)もともとは第三者の動作について使用される場合が多かったが，次第に相手の動作についても使用される場合が増えてくること，(3)最初は上位者と考えられる者に対する使用が多かったが，後には同等或いは下位者と考えられる者に対する使用が増えてくること，などが述べられる。第二節「ハル敬語」においては，この時期ナサル→ナハルの変化を承ける形での「ヤハル」「ャハル」，そして「テハル」などの形を経て「ハル」形が分出してくることが述べられ，五段動詞の場合，大阪語においては京都語とは異なり初期からイ段音接続のイキハルのような形が成立していたこと，などが述べられる。第三節「レル・ラレル敬語」においては，この時期，テ敬語やハル敬語と比べると用例はかなり少ないが，レル・ラレル敬語も確かに使用されており，その中心的な用法は，従来からも指摘されている第三者待遇のものであること，また，時代が下るにつれて，直接の上位者だけではなく疎の関係にある人物一般に対しても使用する例が見えてくること，などが述べられる。

第七章「まとめ」では，第二章～第六章での具体的検討がジャンルごとに要約されたのち，従来から研究の進んでいる同時期の江戸語・東京語の変遷の様相と対照させる形で，大阪語における変遷の特色が述べられる。江戸語から東京語への変化の特色が，いわゆる「分析的傾向」であったのに対し，近代大阪語の場合には一つの方向や傾向に収斂するような様は見られず，多様な傾向性が混在するようなかたちで全体の変化が進んでいったことが指摘される。そして，その背景には，アンビヴァレントな意識のなかに存在する大阪（語）の性格があったのではないかと述べられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は，申請者がこれまで続けてきた研究の一つの総括であり，そのエッセンスである。申請者の一連の試みは，従来の国語史研究のいわば空白部分を埋める基礎的な作業として，特に近代語の史的研究の分野で高く評価されてきたものである。

本論文の優れた点はいくつもあるが，まず第一に，資料的な面での価値ということが上げられよう。これまでの国語史の分野では，近世前期までは上方語，近世後期以降は江戸語というように，地域的軸を異にする言語を一続きのものとして捉える形が当然のこととして研究が進められてきた。むろん国語史も日本文化史の一分野である以上は，それぞれの時代の文化の中心地の日本語が問題にされることはある面では当然のこととも言えるが，近世前期までの上方語の研究成果が輝かしいことに加え，現在においても東京語と肩を並べる地域語の代表として語られることの多い京阪のことばが，資料的な理由もあって歴史的研究の対象からはずされ，地域的軸において一つの連続した言語の歴史が辿られることがなかったのは残念なことだったと言える。申請者は，先に『二十世紀初頭大阪口語の実態』(1990年度科学研究費成果刊行書）において，これまで研究者の間においてさえその存在の知られていなかった，明治後期の大阪落語のSPレコードに残されている当時の人々の声を文字の上で再現させたが，日本における最初期の録音という資料的価値に加え，この資料が発掘，文字化されたことに伴って，明治初期・中期の戯作や落語速記本の価値が改めて顧みられることになり，全体的な量としては充分とは言えないものの，通時的な展開を一応は辿れるだけの資料が揃い，従来の上方語と江戸語・東京語とを継ぎ合せた形の歴史とは異なる，一つの地域言語の通史を辿ることが可能になったのである。

次に研究対象の面から見ると，上にも述べたように，上方語は近世前期までは一貫して中央語としての地位を占めてきた言語であり，その役割を東京語に譲った後も，多くの使用者を有する最大の方言としての地位を守り続けてきているのである。また現代においても，マスコミや一般の話題に上ることが少なくなく，それに関する書物なども多くの読者を得て各種のものが出版されている。そうした状況の中で注目されることは，現代の関西弁におけるの三大キーワードとも言われる，指定の「や」，打消の「へん」，敬語の「はる」が，いずれも本論文が対象とする時期に生成・発展してきたものであるということである。その現代の関西のことばの成立のプロセスが本論文によって明らかにされたと言い得るのである。さらに，本論文の研究対象に関する特色として，この時期に多様な変遷の様相を見せ

るさまざまな表現形式のうち，文法的な面から重要と思われる項目が一貫して網羅的に探究されており，大阪語における根幹的な部分の構造や時代的変遷の様相はほぼ十分に捉えられていると言えるのである。

また，本論文による，江戸後期から大正期に至る大阪語の変遷史の解明ということについての今一つの大きな意義は，上に述べたこととも一部かかわるが，これまで比較的研究の進んでいる東京語の生成や発展に関する研究に対しても新しい見方や観点を提供することができるであろうという点である。一例を上げれば，これまで田中章夫らの研究によってほぼ定説化している「近代語の分析的傾向」ということについても，近代語が無条件に分析的傾向を持つものであるのか，あるいは，たとえば中央語として標準（規範）的性格を求められるところから分析的な傾向が生まれやすくなるのか，といった問題が，本論文の結果から改めて考え直されるべきものになってきたのではないかという点である。

ただし，本論文には，分析・記述の面で，その詳しさが必ずしも一様ではないところも散見する。十分に論が展開され，詳細な分析や記述が行なわれているところが多いが，未だ具体例の提示や問題の提起に止まっている感のする部分もある。しかし，そういった点は，特に量的な面で限定された資料による分析や記述においては，避けがたい宿命的なものであるかもしれない。これまでまったくと言っていいほどに資料が存在しなかった分野に，いきなり大量の資料が出現し，しかもそれが完璧に近いものであるなどということは到底あり得ないことだからである。いずれにしても，そのような点は，けっして本論文全体の価値を損なうものではない。

本論文は，今後この方面での研究の基礎的な文献になるものと考えられ，ほかの資料の出現や別の視角からの考察によって部分的に修正されるところはあるにしても，そうした後続の研究の展開を促したり，これまでの江戸語・東京語研究の成果を見直させたりするであろう点で，その影響力には計り知れないものがあると思われる。本論文を博士（文学）の学位に十分ふさわしい価値を有するものと認定する。